

鳥の とりのいっしょ 一生



みさと あきら

殻を隔てて

長い長い、手を繋ぐだけの清廉潔白なラインを飛び越えた朝。貴方は消えて、代わりに粘液を薄くまとった卵を産み落とした。

動搖。

貴方はどこかへ出掛けたのだと、あるいは自宅へ帰ったのだと思い、思い込み、思い聞かせ、卵はとりあえず、水道水でよく洗って、冷蔵庫へ仕舞い込んだ。

仕事の時間になりつつあったので、私は出かける準備をし、朝食は食べずにパンプスを履く。ドアには鍵はもちろん、チェーンまでかけてあったのだけれど気にしないことにする。

仕事はあまり捲らず、上司には嫌味を言われ、貴方の手の温度を欲しながら帰路についた日。

自宅に帰り着いて、鍵を取り出し、差込んで捻り、ドアを開けて滑り込み、今度は閉めて、パンプスを脱いだあと私が取った行動。

キッチンへ向かい、明かりを点け、冷蔵庫の取っ手を握って開けて、卵に向かい「ただいま」と、話しかけた。ぼたぼたと涙がこぼれたので、とっさに冷蔵庫を閉める。胸が、きゅっと、苦しい。ぺたんと床にへたり込み、涙があふれるままに。

貴方の手が欲しい。手の温度が欲しい。貴方が、貴方、が。

気付くと、私は冷蔵庫の卵を両の手のひらで包み、眠っていた。

卵は貴方だった。

卵は何も語らないし、語れないし、自ら動くことさえもできないし、だから意思表示なんて出来なくて、きっと私以外の誰にも判らないけれど、卵は、貴方。

私は貴方にくちづけをする。

冷蔵庫で存分に冷やされた貴方はひんやりと応じるのだけれど、私にはそれさえも温かい。

それからは卵と私の生活が始まった。

私が出かけるとき、貴方は冷蔵庫に入る。私は帰ると冷蔵庫から貴方を取り出す。

一緒にドラマを観て、思うところを話しかける。貴方はにこにこして聴いている。

ラジオをオンにすると、くすくす笑いを押し殺しているのが判るので、代わりにラジオ局へメールを送ってあげる。

音楽をかけると穏やかになるけれど、私がハナウタを歌うと不機嫌になる。

お風呂のときは「ちょっと待っててね」って、冷蔵庫に入ってもらう。

ときどき顔を近づけると、どぎまぎしている。私がくちづけするかもって思うんだって。ふふ。

けれど。

長くは。

続かなかった。

貴方はある日、割ってしまった。

違う。

私はある日、貴方を落として割ってしまった。

床にべちゃりと散らばった貴方は、透明な白身と薄いくすんだ黄身の卵だった。

貴方は卵だった。

だけど卵は貴方で、私たちは今までとても良い関係を築いてきていて、でも、貴方は割れて散らばってしまった。

跪き、舐め取る。本能的に。とろりとして、ぬるりとして、とても悲しい。

あの夜に貴方が「ひとつになりたい」と言っていたことを思い出す。私だって。私だって貴方と同じくらい貴方と「ひとつになりたい」。

舌が、びりびりする。

名前

これは「たまご」。

それ以上でも以下でもない。

名前というのはとても便利です。簡単なこと。名前があるから意識できる。

欧米の人に青と紺の違いを尋ねてもわからぬと聞いたことがある。

それは「ブルー」であり、それ以上でも以下でもないからだ。

あなたは「雄介」。

それ以上でも以下でもなかったのに。

どうしてわかってくれないの？

あたしは「彩香」でそれ以上でも以下でもないっていうのに。

空の羅針盤

クロちゃんは元気な子犬です。今日は公園に遊びにきました。

滑り台。

ブランコ。

砂場。

……あれあれ？

砂場にキラキラ光る物を見つけました。

「なんだろう？」

クロちゃんは近づいてみました。

見るとキラキラ光っているのは綺麗な石でした。

丸くて透明な綺麗な石でした。

「お母さん、これなあに？」

クロちゃんはお母さんにきいてみました。

「まあ！綺麗な石ね。持っていたらきっといいことがあるわよ」

お母さんは言いました。

クロちゃんは見つけた石をキレイに洗って、窓際に置いておきました。

夜になりました。

寝ていたクロちゃんを呼ぶ声がします。

クロちゃんは目を覚ました。

呼んでいたのは窓の外の鳥でした。

クロちゃんは窓を開けて鳥を部屋の中に入れてあげました。

「見つけてくれてありがとう」

鳥は言いました。

「これはね、空の羅針盤の大事な部品なんだ」

鳥は続けます。

「これがなくなって僕はお家に帰れなかつたんだよ」

「見つけてくれたお礼にすごいものを見せてあげるよ」

そう言うと、鳥は空に舞い上りました。

すると、夜空の星が一斉に落ちてきました。

とても綺麗です。

ふと気が付くと朝でした。

クロちゃんは石を置いていた窓を見に行きました。

すると「ありがとう」と書かれた手紙と青い羽が置いてあり、石はなくなっていました。

わすれもの

鳩が言う。 「ねえねえ、一緒に飛ばない？」

僕は笑って返す。 「あー、翼をどこかに忘れてきちゃったんだ」

猫が言う。 「お腹すいたんだけど、何か持ってない？」

僕はちょっと考えた。 「食べ物は忘れてきちゃったなあ」

鼠が言う。 「家の鍵持っていないんじゃない？ いいの？」

僕は確認した。 「あれ、ほんとだ。忘れっぽいなあ」

影が言う。 「ねえ、なんで動かないの？」

僕は応える。 「体も忘れてきちゃったかな」

風が言う。 「あんた、どこに行くんだい？」

僕は気付く。 「そういえばどこに行くんだったか忘れたな」

雨が言う。 「嫌なこと、あるなら流してあげようか？」

僕は戸惑う。 「何もかもを忘れてきちゃったようだ」

キラキラ

カラスのお姫様はキラキラしたものが大好きです。ダイヤモンドの指輪にクリスタルのワイングラス、銀のコイン。国中からキラキラしたものを集め、部屋に並べて飾っています。

お姫様はカラスなので、空が夕焼けに染まり始めると眠る準備を始めます。今日も真っ赤な太陽を見送りながらお休みになりました。

ところが、夜中に目が覚めてしまいました。経験したことのない、何も見えない真っ暗闇に不安が募ります。窓の外でネズミがチュウと鳴きました。手探りで窓に辿り着いてなんとか開けると、ネズミが話しかけます。

「お姫様、あなたはキラキラしたものがお好きだとお聞きいたしました」

「ええそうよ、キラキラしたものが大好き。国中のキラキラを集めたわ」

「そんなお姫様が早寝なんてもったいないことでございます。夜には素晴らしいキラキラがございます」

「そうなの？ ぜひ見てみたいわ」

「では私の後についてきていただけますでしょうか」

「ええ、暗くてよく見えないけれどお願いするわ」

二人は窓から外に出ました。黒だけの視界を、ネズミの声と足音を頼りに進んでゆきます。小高い丘に着きました。

「ご覧ください」

時間のおかげで闇に少し目が慣れていきました。見上げると満天の星空。お姫様は息を飲み言葉を失いました。ため息だけが漏れます。

「どうです、キラキラしているでしょう？ 残念ながらお姫様のお部屋に持ち帰ることはできませんが、晴れた夜ならいつでも見ることができます」

すっと一つ、星が流れました。

「夜は苦手なのよ。苦手だけれどこれは素晴らしいキラキラだわ。ありがとう」

あくびが出て眠気がやってきました。

「お姫様に喜んでいただけて光栄です。ではお城に戻りましょう」

来た道を辿り、窓からお部屋に戻りました。ネズミはペコリと頭を下げ、去りました。再びベッドに戻ったお姫様はぐっすりと幸せな気持ちで眠りました。

それからカラスのお姫様は、日がしっかりと沈んで星空を見てから眠りにつくようになりました。

かつて一度は生を受けたもの

白い背景に。ぱよん、ぱよん。球体が集う。ぱるん、ぱえん。

この球体を食して、身体が実体化する。私は死神という名の意識体。

ぱよん、ぱえん。ぱかぱか、ぱるるん。桃色の球体は漂っている。かつて一度は生を受けたもの。

今日はこいつを口にしよう。

手近に浮いていた小さな球体を、ひょいぱくと食らう。背景は青い空と青い海。渡りの途中でカラスに食べられてしまつた雄のツバメだった。

飛んで飛んで、海を越えてまだ飛んで。かつてのツバメの意識が私の中に入ってくる。

「暖かいところ！」「元気な嫁さん！」「もっと元気な子供たち！」「大家族！」「生きる！」

最後の「生きる」に少し胸がきゅつとなる。彼は死んでしまつてゐる。私が見届けた。死神故。

飛ぶ、飛ぶ、どこまでも飛ぶ。陸地が見えないからじゃない。きっと「飛びたいから」飛ぶ。飛んでいるだけで僅かに達成感。気持ちは爽快。風は颯爽。日はまだ高い。

けれど私は知つてゐる。

私が実体化して現世に下りると、必ず見届けなければならない。誰かが何かが命を落とす様を。

忘れない。

飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶまだ飛ぶ。

ツバメの意志？ それとも私の忘却欲？ 飛ぶ、気持ちがいい。眩しい太陽、私を後押しする。全てを忘れ、ただ飛んでゆく。飛んで、飛んで、飛んで、まだ飛んで。私は空と一つになる。

旅は終わり、陸地が見えた。

私は惹かれるように草むらへ降りた。鼓動が激しい。ここに、「死」が、ある。そう直感した。見回す。

ススキの陰に卵をまとつたクモを見つける。小さなクモ。たくさんの卵。

珍しい光景に出会つたものだ。卵が孵化しようとしている。死神である私が「生」の場面に出会うなんて。とう、と見惚れてしまったものだ。

でも、私の直感は間違つていなかつた。

そこには「死」があつた。

孵化した卵……子グモたちは母グモに纏わり付き、その口を母グモにくつける。体液を吸つて、食べているのだ。

母グモの意識を感じる。

「生きて！」「一匹でも多く生き残って！」

わらわらと子グモたちは母グモを覆い、見ているうちに母グモの姿は無くなつた。次の命を繋ぐために。

ふわりと浮かんだ私だけに見える桃色の球体を捕まえる。背景は白。桃色が浮かぶ。元の場所。

私は死神。

ここに浮かぶ球体は、かつて一度は生を受けたもの。生前の想いを孕んでゐる。けど。……けど。あの母グモは悔いなんてあつたのだろうか。

LOVERS

鳥籠のなかに二人。

寄り添って佇んで二人。

二人を被う羽毛は雪のような白。

頭のてっぺんから尻尾の先まで白。

首元には紺色の模様。

点々と目を引く模様。

いつからそこにいるのかわからない。

いつまでそこにいるのかわからない。

白い羽毛は元からなのか。

白い羽毛は年を重ねたせいか。

二人はただじっと寄り添う。

二人はただじっと佇む。

甘く切ない時間などではなく。

流れゆくだけの時間でもなく。

ずっと二人、いつまでも一緒。